

令和5年度第2回三重県ひきこもり支援推進委員会 委員発言概要

日 時：令和6年2月13日（火）14時～16時

場 所：三重県勤労者福祉会館 5階 職員研修センター第2教室

出席者：別添出席者名簿のとおり

1. 協議【「三重県ひきこもり支援推進計画」に基づく進捗状況について】

資料1に基づき、葛山地域共生社会推進監および楠本ひきこもり地域支援センター長から説明後、意見交換

【斎藤委員】

・全体の取組の中で特に、夜間中学の取組はぜひ進めてほしい。その際、外国籍の方の参加があるとひきこもり当事者も参加しやすくなる傾向があるようなので注目したい。

・ひきこもり当事者の居場所について、治療中の条件付きで精神科病院のデイケアや地域活動支援センター、就労支援事業所の一部なども受け皿になり得る。そういった既存のサービスの利用対象者を拡張する方向性も居場所支援に加えても良いのではないか。

【平井委員】

・ひきこもり地域支援センターの専門相談件数について、405件というのは結構な数字。PRや広報活動が機能している現れだと感じる。

・職場にも、不登校になった子どもへの対応に対する家族間の考え方の違いで悩んだ職員がいた。仏教の教えの中には、人間の幸せとは愛される・褒められる・人の役に立つ・必要とされることであるということがある。日々、相談に乗りながら感じたのは、気にかけて続けてその人が必要とされることがないか探していくことが、私たちの役割ではないかということ。

【川瀬委員】

・家族が世間体を気にして受け止められず、悩んでいるのに隠してしまうことが良くないのではないかと感じている。家族に寄り添いながら、家族が言葉を発せられるような体制づくりをお願いしたい。

・私の地域にも一人では登校できない小学生がいるが、家族に話を聞くと「そのままでも大きくなったら登校できるようになるだろう。」と言っている。こういった子どもたちに対しては、早くから支援をした方が良いのではないか。ひきこもり支援が市町・地域社会まで確実に広がって、身近なものとして家族に寄り添った支援ができる体制づくりを考えてほしい。

【浦田委員】

- ・地域若者サポートステーションと関係機関との連携について、市町が随分動いてくれるようになったと感じている。ただし、支援の仕方に悩んでいるようなので、これから研修等でサポートしていくことが必要なのではないか。
- ・就労支援をする中で、定時制や通信制の高校では課題を持つ生徒の支援について教員の知識があるが、全日制高校の教員などには理解が進んでいない印象。その中で、学校との連携がこれから課題になっていくと感じている。

【堀部委員】

- ・各種支援機関との連携の中で様々な情報を得て、支援につながられるようになったと感じている。一方、支援活動をする中で、親から関与しないでほしいと言われるケースもある。親の理解がなければ本人の自己肯定感は構築できない。家族や第三者に打ち明けられる体制があれば良いと思う。
- ・日本では諸外国と異なって、カウンセリングを受けることが普通ではないという認識がある。そういったところの周囲の理解が必要だろうと感じる。

【伊藤委員】

- ・支援者のスキルアップなど、支援者の支援や多職種の連携も図られ充実している印象。
- ・こもればの開設については、それまで不登校の支援が小中学校卒業時点で途切れてしまう懸念があったが、こういった資源によって支援につながるのではないか。
- ・実際の支援について、家族の「そっとしておいてほしい。」という希望と早期対応との兼ね合いが課題だと感じている。
- ・SNSでの相談支援は現実として対象者には届きにくく、成果が上がっているとは言えない状況。ただし、支援を拒絶したり、関わりを持つことが困難な人とつながるツールになればと期待している。社会とつながりを持つきっかけは、具体的な成果だけでなく多種多様であって良い。
- ・個人的に、計画の成果指標を設定するなら、「重層的支援体制整備事業に取り組んでいる市町の数」なのではないかと考えている。三重県は11市町が取り組んでいるところだが、これは全国的で3番目に多い。このことは、県から市町へのサポートがしっかりされている結果だと思っている。引き続き、市町への支援に取り組んでほしい。

【長友委員長】

- ・来年度、重層的支援体制整備事業に取り組む自治体は全国で400自治体、およそ4分の1程度であるので、全国的にも比較的早期から取組が進んでいる。重層的支援体制整備事業の中でひきこもり支援も注目され、より取組が進めばと期待している。

【倉田委員】

・精神障がい者へのアウトリーチの現場では、近年ひきこもりに対するアウトリーチの相談が増えている。アウトリーチによる支援は効果的ではあるものの、本人が望まない場合には負担が大きい。本人の承諾がない中で、家族のみの要望でアウトリーチをすることの怖さがある。一方で、家族や周囲の方はアウトリーチに行けばすぐに何とかするという期待値が高い。しかし、無理に外に出すわけにもいかないので、スタッフは板挟みになってしまうといった難しさを感じている。

・アウトリーチの際大事なことは、家族関係を見極め、あるがままを受け入れ、見守り続けることなのではないか。

【野村委員】

・たくさん支援メニューがある中で、誰がすべてをコーディネートして一人ひとりの支援につなげていくかといったところが見据えられていないように思う。

・不登校支援の現場では、スクールソーシャルワーカーが福祉・医療に関する知識が十分でない教職員に対して、支援メニューで誰がどんなことをするのかをイメージできるように働きかけ、対象者に対してどのような支援を進めていくのかを細かく計画し、必要であれば関係機関とケース会議を開催することもある。

・アウトリーチについては、手あたり次第にすれば良いということではなく、計画に基づいて教職員や家族の話を聞きながら行っていく。いざ本人に会うと、本人が何をしたいのか誰も聞いていないため、支援メニューにつなげることができないことがある。家族が聞けないことを支援者がいきなり聞くことは難しいので、本人の興味がありそうな話題や遊びでコミュニケーションを取りつつ、家族とともに支援の方向性を定めていくような時間を要する支援が必要なケースもある。

・たくさん取組はあるが、子どもの心や背景と大人が考えているところとのギャップは課題だと感じた。

【山本委員】

・地域の中で見守りを行っていくことも民生委員・児童委員の役割の一つであるので、ひきこもり支援フォーラムなどへの参加を呼び掛けて啓発を進めているところ。

・前回の民生委員・児童委員の調査から4年を経過していることから、再度調査をしても良いのではないかと感じている。

(メタバース等のオンラインコンテンツについて)

【浦田委員】

・ある支援団体から、教育委員会のメタバースの内容が古いと言う意見をもらったが、最新のゲームをするような人には精度が低いように映るようだ。東京ではゲームを使用して、当事者を巻き込むような支援があるという話を聞いた。こういった既存のコンテンツを活用するなどして、より関心をもってもらえるような支援を検討すると良いのではないか。

【長友委員長】

・オンラインコンテンツは常に改良が必要となるため自前で運営するのは困難ではないか。既存サービスを利用している人に運営してもらおうのが望ましいと思う。

【倉田委員】

・当事者に聞くと、行政が作ったオンラインコンテンツを利用する人は少ない。オンラインゲームで知り合った人に諭されて、支援につながったケースもある。ピアサポーターで詳しい人に協力してもらいながら、既存のコンテンツを上手に活用する方が先進的ではないだろうか。

【野村委員】

・子ども心身発達医療センターでは、ゲーム依存の子どもに対して、職員と一緒にSwitchをしながらコミュニケーションを取り、集団に加えていく取組をしていた。現場としては既存のものをフル活用したいと思っているところ。

(伊賀市社会福祉協議会の取組について)

【平井委員】

・伊賀社会福祉協議会では1月28日に家族研修会を開催した。46名の参加があり想定よりも多くの方に参加いただけたと感じている。参加者のうち家族が14名で、研修会が終了後に家族のみで話し合いの場を設けたところ、多くの感想をもらい、参加して良かったという声もあった。

・不登校でも、多くの人たちの中には、親の育て方や学校が悪いといったイメージがあって、親に辛くあたっていることがあった。こういった取組の中で様々なPRすることで、偏見を持っていた人たちにもそうではないと分かってもらう、そんな地域社会にしたいというのが狙いの一つ。取組が耳に入ったのか、家族が周囲から辛く当たられなくなった例もあったので、地道に活動を続けていくことが大事だと考えている。

・ふれあいいいききサロンでひきこもり学習会を開催して参加者にひきこもりについて知ってもらう取組も行っている。こういった活動の中で自然といろいろな人たちを受け入れられる地域社会になっていくのではないかと感じている。

(不登校生徒数について)

【葛山地域共生社会推進監】

・令和4年度不登校生徒数は、小学生で1,368名、中学生で2,590名、計3,958名となっている。

【野村委員】

・不登校の数については、年間30日以上欠席をカウントしている。ひきこもりと多少異なる部分があって、完全に外に出られないというわけではない。また、カウントの仕方に変更があって、学校以外にもフリースクールや放課後デイサービスへの参加も登校日数に加えるなど計算方法も変わっている。

2. 協議【次期「三重県ひきこもり支援推進計画」策定に向けて】

【浦田委員】

・目標数値について、事業開始時点では数値も増えていくが、ある程度周知されると伸び悩む。人口減少のなかで、確実に減少していくことが予想されるので指標設定の難しさがある。地域若者サポートステーションでは量ではなく質を重視する指標に変わっていったので、このことについては、次期計画でも焦点になるのではないかな。

【平井委員】

・ひきこもり支援推進計画全体の目標のうち、「ひきこもりに関する理解が進んだと感じる県民の割合」は令和6年度目標値が70%のところ既に87%である。次期計画の目標数値の設定は容易ではないのではないかな。さらに、ひきこもりに関する理解と言っても、理解の度合いは様々で、実効性のある目標数値を設定できないかな。

【長友委員長】

・人口減少の中で、右肩上がりの目標数値の設定は検討すべき。

【川瀬委員】

・数値目標も大切だが、いかに当事者の心情に寄り添うことが重要かということをも県民が理解していけるような視点を計画に盛り込めないだろうか。

【齋藤委員】

・計画全体について、若年層への支援に偏っている印象がある。シニア層への支援について懸念しているところで、特に8050以降の親なき後のひきこもりをどうするかという問題も、10年以内に大きな問題になってくるだろうと考える。そういった方の支援をどう考えるかといった視点を盛り込むとより包括的な支援になるのではないかな。具体的には、家族がどのように経済的に支えるか、還暦を迎え高齢となった親の介護をどのようにサポートしていくのか、年金受給できるのに役場を恐れて受給しない当事者をどのように支援するかなど、高齢で社会参加・就労の可能性が低くなっていくひきこもり支援のあり方なども議論に加えてほしい。

【堀部委員】

・現在ひきこもり状態にある人への支援だけでなく、団塊の世代とは異なる現代の人たちの自己肯定感を高めることについて検討していかないと、これからもひきこもり・不登校が増え続けていくことになると思う。学校・職場といったところで評価されず、追い込まれたような状態になっていることに目を向けて何かしらの評価指標が提案できないだろうか。